

序論)

皆さん、おはようございます。

突然ですが、皆さんはクリスチャンとして生活する中で、「これはしてもいいのだろうか？」と迷ったことはありませんか？聖書には「殺してはならない」とか「盗んではならない」といった明確なルールがあります。これらは分かりやすいし、守りやすいみことばです。

しかし、私達の生活には、聖書で明確に禁止されていない、白とも黒ともつかない、いわゆる「グレーゾーン」がたくさんあります。例えば、職場の飲み会です。「付き合いだから参加すべきか、でもあまりに乱れた雰囲気なら断るべきか」。あるいは、タバコをすってもいいのか、悪いのか。仏教のお葬式にいったいいいのか、いった場合どのように振る舞ったら良いのか。人によっては、掛け捨ての保険というのは賭け事になるのだからだめなんじゃないか。とか、聖書には全く同じ状況といえるようなものがなくて悩んでしまうようなことが、私達の生活の中には色々あります。

実は、コリント教会の人々も、まったく同じ種類の悩みを抱えていました。それが、8 章で語られていた「偶像に献げた肉を食べてもいいのか」という問題でした。当時、市場で売られている肉の多くは、一度異教の神殿で偶像に献げられたものがほとんどで、偶像に献げられていない肉を見分けて食べることは困難でした。そのためコリント教会の意見は真っ二つに割れました。「偶像なんて実在しない。だから自由に食べられる」と言う知識派の人たちと、「いや、それは偶像礼拝につながる。罰があるかもしれないから避けたほうがいいのではないか」と恐れる人たちです。

そんな人達に対してパウロが答えを出しているのが今日の箇所です。しかし、その内容は単に「食べていいか悪いか」というルールの話をするのではなく、キリスト者として、「私達が神様から与えられた『自由』を、どう使うべきか」というテーマに対する答えでした。

パウロはここで、3つの明確な基準を示しています。

1. 私達は誰と交わっているか
2. 私達の自由は何のためにあるのか
3. 私達の人生の最終目的は何か

です。この3つの基準を通して、私達の日常生活にある判断に迷う課題に対する答えを教えられていきたいと思います。

1) 私達は「交わる者」である (16-22 節)

まず、パウロが示す第一の基準は「私達は誰と交わっているか」という点です。

A. キリストとの交わり

16 節、17 節をお読みします。

10:16 私達が神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私達が裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。

10:17 パンは一つですから、私達は大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。

(16 節表示) ここでパウロは「聖餐式」の話をしています。私達が礼拝の中でパンと杯を受けるとき、それは単なる記念行事ではありません。ここで「あずかる」と訳されている言葉は、ギリシア語で「コイノニア」であり、これは「交わり」や「共有」を意味する言葉です。つまり、聖餐式とは、イエス・キリストのいのちと、私達とが一つに結び合わされる霊的な交わりであり、その十字架の血と体を覚えることで【主】と一つになる時なのです。

結婚式を想像してみてください。新郎新婦が指輪を交換します。それはただの金属の輪っかを渡す儀式ではありません。「私はあなたと一つになります」という契約のしるしです。聖餐式も同じです。私達はパンと杯を通して、キリストと一つになり、また隣にいる兄弟姉妹と一つになり、その聖餐にあずかっている一人ひとりが一致してキリストのからだを建てあげていくことを確認する時なのです。

18 節を読んでみましょう。

10:18 肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。ささげ物を食する者は、祭壇の交わりにあずかることになることはありませんか。

これは礼拝と礼拝のために献げられた生贄を食べる事に関する原則ですね。レビ記 6 章をみると、穀物のささげものや、罪のためのいけにえを祭司がたべるように命じられています。つまり、【主】への捧げ物を食べる者とは、【主】によって聖別された祭司なのです。

「ささげ物を食する者は、祭壇の交わりにあずかる」という箇所を直訳すると「捧げ物をたべる人は祭壇にいる」となります。つまり、捧げ物を食べる人は、それが献げられた神を礼拝する祭司ということです。これは古代世界の共通理解でした。そして、そのように捧げ物を食べる祭司は、その礼拝対象となる神様の所有物であり、一つとされているものなのです。

B. 悪霊との交わりの危険

だからこそ、パウロは警告しています。19 節から 22 節です。

10:19 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。

10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

10:21 あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。

10:22 それとも、私達は主のねたみを引き起こすつもりなのですか。私達は主よりも強い者なのですか。

パウロは「偶像そのものは木や石に過ぎない」と知っていました。しかし、「その偶像礼拝の背後には、悪霊の働きがある」ことも見抜いていました。だからこそ、彼は、(20 節表示)「私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」と言っているのです。

そして 21 節で、

10:21 あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。

と語っています。これは「能力的に飲めない」という意味ではありません。「霊的にあり得ない」「やってはならない霊的不倫だ」と言っているのです。霊的な世界に中立地帯はありません。私達はキリストにつくか、それ以外につくか、どちらかなのです。

現代の私達に置き換えてみましょう。私達は異教の神殿で肉を食べることはないかもしれませんが。しかし、現代にも「悪霊の領域」は巧妙に存在しています。例えば、最近流行りのスピリチュアルなもの。「健康のため」と言われるヨガや瞑想の中には、その背後にヒンドゥー教的な霊性を深く持っているものがあります。だから、ただの体操、ストレッチとしてやるなら良いですが、その霊的背景が説明され、それを理解したうえで動物をイメージしてヨガをするならば、それは霊的姦淫を犯しているといえるのではないのでしょうか。

または、毎朝のテレビの星占いや、子どものころよくやった靴飛ばし占い、これも聖書が禁じる占いの領域に足を踏み入れることと言えます。みなさん、「あーした、天気になーれ!」とかいって靴を飛ばして、ひっくり返ったら雨、ちゃんと靴底が下になっていたら晴れ、横に倒れたら曇りとかやりませんでしたか? 子どもの遊びと思えるようなところに、霊的な要素があったりします。

また、「どの宗教も行き着く先は同じだ」という宗教的混合主義。これも耳障りは良いですが、唯一の【主】を軽んじることになります。だからこそ、そういった霊的な事柄を気にせず、ある意味では無神経に偶像の肉をバクバク食べるような人たちに対して、パウロは 22 節で「私達は主のねたみを引き起こすつもりなのですか」と言うのです。「ねたみ」と聞くと、人間の醜い嫉妬を思い浮かべるかもしれませんが、聖書が言う神様のねたみは違います。これは「熱情的な愛」のことです。配偶者が自分以外の相手に思いを向けたら悲しみ、怒るのは当然です。【主】は偶像礼拝を禁止するとき「私は妬む神だ」と言われました。神様は、私達を独占したいほどに、愛しておられるお方なのです。

だからこそ、私達は、霊的な事柄を対して無神経に振る舞うのではなく、むしろ、偶像的文化があふれる社会にあって霊的なことに敏感になり、神様の妬みを買うようなことは避けなければいけません。

だからこそ、私達は私達に与えられた自由を使うための基準の1つ目がこれです。
みなさんこの基準を読みましょう

自由の基準 ①

「誰と・何と交わっているか。」

キリストとの交わりは、悪霊との交わりと両立しない」

私達は、日常生活の中にあるあれこれが、【主】以外の他の何かに霊的に繋がっていないか。
正しく見分けて歩みましょう。

2) 自由には目的がある

次に、パウロは自由のための第二の基準を示しています。

それは「私達の自由は何のためにあるのか」という点です。23 節から 30 節を見ていきます。

A. 自由の三つの質問

まずは 23 節と 24 節を読みましょう。

10:23-24

「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。
「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。
だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。

当時、コリントの教会には「クリスチャンは自由だ！ すべてのことは許されている！」と主張する人たちがいました。パウロはそれに対して、「その通りだ、許されている」と一度認めます。
しかし、すぐに三つの質問を投げかけます。

1. 「それはキリスト者として本当に有益ですか？」
2. 「それは人を育てますか？」
3. 「それは他者の益になりますか？」

ここでパウロは、私達の自由を問答無用に「制限」しようとしているわけではありません。

「方向づけ」つまり、どちらの方向に向かって自由を使ったら良いのか、自由の目的を示そうとしているのです。自由とは、目的なき放縦ではありません。

例えば、皆さんは車を運転する自由を持っています。しかし、どこへでも好き勝手に走っていいわけではありませんよね。車が歩道を走って良いわけじゃないですし、最近よく話題になる逆

走をしていいわけでもありません。車は、その車が通るべき道筋があり、方向があるのです。日本の場合は、車は左側を走らなければいけないと決められています。これは車の運転の自由を制限するためのルールでしょうか。違いますよね。事故が起こらないように、運転の自由を使ってちゃんと目的地に着くためのルールです。

それと同じように、クリスチャンの自由には向かうべき方向があり、目的があるのです。

パウロはその方向を見極めて、私達がキリスト者の道から脱線や、逆走しないためにその行為が本当に「【主】の前で有益か?」「人を育てるか?」「人の益になるか?」を問うように語りかけているのです。

みなさん、人生の選択で迷うことがあるとき、この3つの問いを自分に語りかけてみましょう。そして、もし無益であり、人を育てず、他の人の害となるような要素が思い浮かんだのならば、その道は的外れな道であり、もしかしたら逆走して大きな事故に通じる道なのかもしれません。勇気をもって方向転換する自由を使っていきましょう。

B. 日常生活での知恵

パウロはこれをコリント教会の人たちが置かれた日常生活に適用して語っています。それが 25 節から 30 節で、二つの原則を示しています。 まずは 25-27 節

原則 1：基本的には自由です（25-27 節）

10:25 市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。

10:26 地とそこに満ちているものは、主のものだからです。

10:27 あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。

パウロは、市場で売っている肉を買うとき、あるいは信者ではない友人の家に招かれたとき。「これは偶像に捧げられたものですか?」といちいち詮索せずに、感謝して食べなさい、と言います。なぜでしょうか。偶像に献げられていようと、そうでなかろうと、すべてのものは【主】のものであり、【主】によって与えられたものだからです。すべてのものは神様が造られた良いものです。肉そのものが悪霊に汚染されているわけではありません。だから、私達は、すべてのものを神様からの賜物として、感謝していただく自由があります。

原則 2：他者の良心への配慮（28-30 節）。

しかし、例外があります。もし誰かが、わざわざ「これは偶像に献げた肉ですよ」と指摘してきたら、どうすべきか。です。28-29 節前半を読みましょう。

10:28 しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。

10:29a 良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、知らせてくれた人の良心です。

パウロは「それは偶像に献げられた肉ですよ」と指摘されたら「食べてはいけません」と言っています。なぜでしょうか。肉が急に汚れたからでしょうか？ 違います。肉は肉のままです。

食べるのをやめる理由はただ一つ。「それを教えてくれた人の良心を守るため」です。

もしあなたがそこで平気な顔をして食べたら、その人は「クリスチャンでも偶像崇拝をしているんだ」と誤解し、罪悪感を抱えながら真似をしてしまうかもしれません。自分の「食べる自由」よりも、目の前の人の「良心」を優先する。これがキリスト者の自由の基準なのです。

さて、今日の箇所の中で 28 節の後半と 29 節が一番、理解するのが難しい箇所です。

10:29b-30

私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるのでしょうか。もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。

28 節と 29 節の前半では「偶像に献げられた肉だと指摘されたら食べてはいけない」とパウロは言っていました。しかも、それは他の人の良心のためにそうしなさいと勧めていました。それなのにここで「どうしてほかの人の良心によってさばかれるのでしょうか」と言われると、前の部分でいっていることと真逆のことをパウロが言っているように思えます。

パウロが言いたいことはこういうことです。

私達には何を食べても良いという自由があります。でも、その自由を行使して偶像に献げた肉を食べ、その自由の結果、「あの人は偶像礼拝をしている」と人々に裁かれたり、すべてのものは【主】から与えられたものなので、感謝してコリントで流通しているお肉を食べているのに、その食事によって「あの人は【主】を軽んじている」というように悪くいわれたとしたらどうでしょう。そのように自由を使うことで、誤解を生じさせたり、感謝の行為が悪くいわれたりするようなことがあってはいけない。それぐらいならば、その人たちのことを配慮して肉を食べないほうがいい。

ということです。聖書知識に基づいた自由の行使、行動であったとしても、他の人に真逆の誤解や躓きを与えるのならば意味がないのです。だから、パウロは他の人に配慮して、「偶像に献げられた肉という人がいるのならば、食べてはいけません。」と言っています。

これを現代に適用してみましょう。

例えば、教会の礼拝スタイル。「私は最新のワーシップソングやゴスペルが好きだ。ドラムもガンガン鳴らしたい」。それも自由です。しかし、年配の兄弟姉妹がそれによって礼拝に集中できないならどうでしょうか。愛のために、伝統的な讃美歌も大切にします。これが「徳を高める」ことです。私は以前、賛美チームのリーダーの奉仕をしていました。賛美チームのリーダーですから当然、土曜日には練習をたっぷりし、日曜日の朝も誰よりも早く教会に集って練習をし、その上でハモリなども工夫しながら一生懸命賛美していました。でも、ある時言われました。「賛美チームが素晴らしすぎて思わず聞きいってしまう」と、その時、私は思いました。「ああ、僕は聞かせる賛美、カッコいい賛美をしようとしていたのかもしれない」と。その結果、一生懸命

賛美することには違いがありませんけども、不必要なハモリとか、楽器のアレンジなどを減らし、シンプルかつ礼拝者が【主】に思いを向けることができるようにすることを心がけるようにしました。だから、その教会の賛美チームの名前は「結びつける」を意味するレビと「褒め称える」を意味するユダからとって「レダ」という名前でした。みなさん、レダを前後逆にするとどうなりますか？「ダレ」ですね。賛美チームが何者なのか誰にもわからないけど、礼拝者が賛美によって【主】に結びついてほしい。という思いがそのチーム名にはありました。

少し話がそれましたが、私達はこのように自由があるけども、その自由を他者に配慮するために用いていくことが大切なのです。今の多くの人がいうような「自分の自由なんだから、他の人を気にする必要がない。」というのとは真逆なのです。

だから、自由のための第二の基準はこれです。

「キリストの自由である。でも、その自由を、他者を建て上げる方向で用いているか？」

みなさんの自由は、他の人に不用な誤解を与え、躓きを与えていないでしょうか。周りの人たちが【主】に結びつくためにその自由を用いているでしょうか。

3) すべてを神の栄光のために

最後に、パウロはこの長い議論を、一つの大きな目標へと導きます。

A. 包括的な人生の目的

31 節をご一緒に読みましょう。これも聖書の中でも有名な言葉の一つですね。

10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

これが黄金律です。クリスチャン生活の最終目標です。

注目してほしいのは「すべて」という言葉です。例外はありません。

教会にいる時だけではありません。職場にいる時も、台所で料理をしている時も、趣味を楽しんでいる時も、食べる時も、寝ている時でさえも。私達の人生のすべてが、神様の栄光を現すためのものなのです。

「神様の栄光のために」という目標を見据えて生活すると、みえる景色が一変します。

職場でのちょっとした雑談や言葉遣いが変わります。家族と過ごす夕食の時間が、自分の優先順位が変わります。

例えば、仕事仲間との雑談は人の失敗を面白おかしく笑っていたところから、むしろ、その人のすごいところ、尊敬するところを語り、どうしたら補えるかになります。家族の過ちに対してキツく当たっていたところが、むしろどうしたら助けることができるかになります。お祈りをお願いされるのが嫌がっていた人が、率先して祈るようになります。神様の栄光のためにという目標が定まると、私達の行動の選択肢も変わるのです。

B. 実践的な生き方

そしてパウロは、神様の栄光を表すための具体的な生き方としてこう言います。

32 節、33 節を読みましょう。

10:32 ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。

10:33 私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。

私達が、配慮すべきなのは教会の人だけではありません。日本の人だけでもありません。すべての人が躓かないように配慮していくべきなのです。そして、その人々が救われるために、すべてのことで、すべての人が喜ぶようなことを選択していくのです。

それが結局、神様の栄光につながるのです。

これをみると伝道はただ、聖書の言葉を伝えるだけでなく、人々に喜びを与えていくことであることがわかります。

みなさん、私は、私達は どうしたら富川の人を喜ばせることができるでしょうか。振内の人を、日高の人を、平取の人を、鵜川の人を、苫小牧の人を、静内の人をどのようにしたら喜ばせることができるでしょうか。私は聖書のことばを語ることばかりに思いがむいていて、この視点が足りなかったことを思われました。

C. キリストに倣う

そして、最後にパウロは 11 章 1 節でこう締めくくります。

11:1 私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。

私達の究極のモデルは、イエス・キリストです。

キリストこそ、神であられるのに、その権利を主張せず、僕の姿をとってこの地上に来てくださいました。イエス様は、私達以上に「すべてのことが可能」なお方でした。それこそ、イエス様を迫害していたパリサイ人たちを一掃することも、十字架から降りる事もできるお方でした。しかし、私達の救いのために、ご自分の権利を放棄して、十字架の死を選ばれました。

「すべてのことは許されている」という全能の自由をお持ちの方が、「しかし、すくいために」と、不自由な十字架にかかってくださったのです。

私達はこの方にならって、自分の小さなプライドや権利を手放して、【主】のため、人々のために歩いていくべきではないでしょうか。【主】イエスキリストは、そのためにご自分のすべてを捨てて、十字架の贖いによって私達に愛を示してくださいました。この十字架の愛に触れた者だけが、「主よ、あなたが私のために命を捨ててくださったのなら、私も隣人のために、自分の小さな権利を脇に置きます」と言えるようになるのです。これこそが「キリストに倣う」ということです。

だから、自由を使うための第三の基準はこれです。

「キリストに倣って、すべてを神の栄光のために用いていく」

結論)

愛する兄弟姉妹のみなさん。

今日、パウロを通して教えられたのは——キリスト者の自由とは、ただ「してもよいか・悪いか」を判断するための基準ではなく、「どのように生きるか」を形づくる方向性である、ということでした。

第一の基準は、「私達は交わる者である」ということでした。

キリストとの交わりを最優先し、それを損なうものから離れる。

この姿勢なくして、キリスト者の自由は成り立ちません。

第二の基準は、「自由には目的がある」ということでした。

自由は自分を主張するための道具ではありません。

むしろ、隣人を建て上げるために用いられるとき、自由は本物になります。

愛のゆえに制限できる自由、それは成熟したクリスチャンに与えられる恵みです。

第三の基準は、「すべてを神の栄光のために生きる」ということでした。

食べるにも飲むにも、何をするにも。

それらは小さな日常の行為ですが、それらすべてが礼拝とつながっています。

私達の日々は、神様の栄光を指し示す舞台なのです。

——ですから今週、「これはしてもいいのだろうか？」と迷う瞬間が訪れたなら、この3つの問いを思い返してください。

- ・ これはキリストとの交わりを深めるだろうか。
- ・ この選択は私ではなく、誰かを建て上げるだろうか。
- ・ この行動を通して、神様の栄光は表されるだろうか。

今、改めて自分がどのような基準で日常生活を歩み、どのような言葉を日々使い、どのように時間を使ってきたかを思い返してみましょう。

そして、聖書から教えられた自由を使う基準を当てはめて、治すべきところがないか、今週、この基準に当てはめて自分ができるところがないか、黙想してみてください。

しばらく、【主】への応答の時を持ちます。